【カテゴリーⅠ】

日本建築学会計画系論文集 第87巻 第797号, 1106-1115, 2022年7月
J. Archit. Plann., AIJ, Vol. 87, No. 797, 1106-1115, Jul., 2022
DOI https://doi.org/10.3130/aija.87.1106

集合住宅における子ども独立後の夫婦世帯にみる住み方の共用傾向

HOW EMPTY NESTERS APPRECIATE THE SHARED USE OF COMMON DWELLING SPACES IN THEIR CONDOMINIUMS

小伊藤 亜希子*1, 池田 裕美子*2, 村 田 順 子*3, 宮 﨑 陽 子*4

Akiko KOITO, Yumiko IKEDA, Junko MURATA and Yoko MIYAZAKI

This study seeks to identify housing design needs among elderly couple households by examining how empty nesters suffer from an incompatibility between their daily activities and the dwelling space in their condominiums and by tracing how they adjust their space use over time. To this end, an online survey was conducted with the target households classified according to the number of years that had elapsed since their children had left home. The survey findings demonstrate the formation of personal territories by both spouses in parallel with their keen appreciation of the shared use of common dwelling spaces including living room.

Keywords : *Condominium, Way of Dwelling, Shared Use of Common Dwelling spaces, Empty Nester*
集合住宅, 住み方, 共用傾向, 子ども独立後夫婦世帯

1．はじめに

(1) 研究の目的

現代日本の都市は、戦後のマスハウジング時代にモデル化された住宅で溢れている。それは、欧米住宅を模倣し、近代核家族の器として普及した公室と私室の分離を主軸とする、いわゆる nLDK 型平面をもつ住宅である。しかし人口減少時代となり家族規模も縮小している現代においては、求められる住宅は大きく変化し、ストックとニーズのズレが拡大していくと考えられる。また、nLDK 型住宅の n 室の個室は、夫や妻個人の専用スペースを想定していないが、住生活における夫婦の個人化が指摘される現代において、夫婦と子どもの標準家族世帯にとっても住宅平面とニーズの間にはズレが存在している可能性がある。一方で、日本人の住み方においては、個室があっても公室で行う行為が多いことも様々に指摘されてきたことから、本研究においては、家族全員が共用で使用する空間を重視する傾向を、住み方の共用傾向として注目する。

以上をふまえ、本研究では子ども独立後の夫婦世帯を取り上げる。世帯主年齢階層別の家族類型分布をみると（図１）、世帯主年齢 50 才以上から夫婦と子世帯に代わって夫婦のみ世帯が増加し、60 代後半から 70 代では、全体の約 1/3 を占めている。子どもが独立し、のちに単独世帯に移行するまでの夫婦二人のライフステージは、ライフサイクルの一定の位置を占めており、住要求にあった住み方をいかに実現するかが問われていると考える。

本研究は、子ども独立後に集合住宅住戸に居住する夫婦のみ世帯を対象に、住み方と住空間のズレを検証し、そのズレが修正されていく過程を追うことで、夫婦個人の専用スペース要求と、住み方の共用

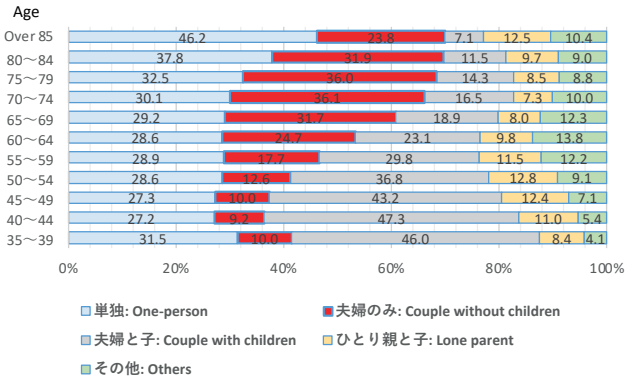


Fig.1 Occupancy of personal spaces (if any) by spouse
＊Data from IPSS: Household Projection for Japan：2015-2040
図１　世帯主の５歳階級別、家族類型の推計（2019 年）
＊国立社会保障・人口問題研究所『日本の世帯数の将来推計（2015-2040 全国推計）』（2018 年推計）より作成

*1 大阪公立大学大学院生活科学研究科　教授・博士（工学）　Prof., Graduate School of Human Life Science, Osaka Metropolitan University, Dr.Eng.
*2 積水ハウス㈱　修士（生活科学）　Sekisui House, LTD., M.Life Science
*3 和歌山大学教育学部　教授・博士（学術）　Prof., Faculty of Education, Wakayama University, Ph.D.
*4 羽衣国際大学人間生活学部　准教授・修士（教育学）　Assoc. Prof., Faculty of Human Life Science, Hagoromo University of International Studies, M.Ed.

傾向の双方を捉えることを目的とするものである。

(2)　既往研究と本研究の位置付け

夫妻の個人化や専用スペース要求に関する研究としては、夫婦の「自分の時間量」と「自分の場所」の関係から一人で過ごすことのできる空間の必要性を指摘した山崎らの研究[1)]や、共働き夫婦を対象としたシナリオアプローチによる実験から、生活の個人化に対応した住宅計画の必要性を指摘した研究[2)]などがある。また特に妻の専用スペースへの要求については、様々に指摘されてきたところである[3) 4)]。いずれも夫婦一単位の核家族を前提とした nLDK 型住宅平面の変容方向を模索するものだと言える。

また標準家族から高齢世帯へのライフステージの移行期に着目した住宅計画に関する研究もいくつかある。番場ら[5)]は、60 才以上の高齢期を年齢によって 5 つのシルバーステージに分類し、住まい方の変容を把握した。ステージの進行とともに、世帯構成は夫婦と子から夫婦、単身へと変化し、身体機能の低下とともに活動範囲が狭くなるとともに「個」の拡大と縮小の過程が捉えられている。また築 20 年を経過した首都圏の団地の調査により、「標準世帯」から「非標準世帯」への移行過程の住まい方をとらえた沢田らの研究[6)]は、壮年・高齢期の夫・妻の個人領域が私的拠点を内包する形で形成されている可能性を指摘しており大変参考になる。いずれも特定の団地を対象とした調査であることから調査対象は多様な世帯構成の家族が含まれ、子どもがいる世帯が中心となっている。

これらの成果をふまえ、本研究では、子ども独立後の夫婦世帯のライフステージに焦点をあて、時間経過による住み方変化を捉え、夫婦の生活行為から個人領域の形成と共用傾向の相互関係を明らかにしようとするものである。個人領域形成の傾向を捉えつつ、同時に日本人家族の住み方として、家族全員が共用で使用する空間を重視する傾向を共用傾向として注目していることが特徴である。またウエブアンケートの利用により、子ども独立後の夫婦世帯のみを抽出することが可能になり、さらに子ども独立後の経過年数 5 年以内、10 年以内、20 年以内と明確な条件を設定したことで、時間経過と住み方変化の関係を捉えたことも特徴の一つである。

本研究は、日本建築学会近畿支部で報告した内容[7)]に追加分析を加え発展させまとめたものである。

(3)　調査方法

子ども独立後 5 年以内、10 年以内、20 年以内で割付したウエブアンケート調査（割付各 150 、総数 450)、及び、それを補完する 6 件の訪問住み方調査を実施した。ウエブアンケート調査は、2019 年 9 月に実施し、対象者は以下の条件を満たすものとした。

1)分譲集合住宅に居住している。

2)子どもが独立し、夫婦二人で居住している（大学生等が下宿している場合を含む)。

3)子ども独立後 20 年以内である。

4)夫婦ともに介護を必要としていない。

5)子ども独立以前から今の住宅に居住している。

対象とする住宅を集合住宅としたのは、その間取りのほとんどが nLDK　型であり、また住戸の床面積や室数のばらつきが戸建て住宅より小さいため[注1)]、本研究の目的とする住み方把握に適していると判断したためである。

訪問住み方調査は、2018 年 7 月に 3 件、2019 年 10 月から 12 月に 3 件の合計 6 件を対象に実施した。関西圏に立地する集合住宅で、上記 1)～4)の条件を満たす世帯を対象とし、大阪府内の集合住宅へのチラシ配布による募集に加え、機縁法により条件に合致する世帯を選定した。アンケート回答者の属性を表 1 に示す。調査対象夫婦の就労状況について、夫はフルタイム勤務 39.3%を含み現在何らかの

Table 1　Attributes of questionnaire respondents
表 1　アンケート回答者の属性

有効回答数 Number of responses		450	有効回答数 Number of responses		450
年齢 Age (Husband)	50-59	74	年齢 Age (Wife)	40-49	1
	60-69	240		50-59	114
	70-79	133		60-69	247
	80-	3		70-79	88
性別 Sex	男　male	328	延床面積 Total floor area	50㎡ or less	3
	女　female	122		51-60㎡	24
居住地域 Residential region	北海道：Hokkaido	21		61-70㎡	84
	東北：Tohoku	6		71-80㎡	146
	関東：Kanto	227		81-90㎡	92
	中部：Chubu	33		91-100㎡	63
	関西：Kansai	110		101-110㎡	17
	中国･四国：Chugoku/ Shikoku	15		over 110㎡	10
	九州：Kyushu	38		unidentified	11

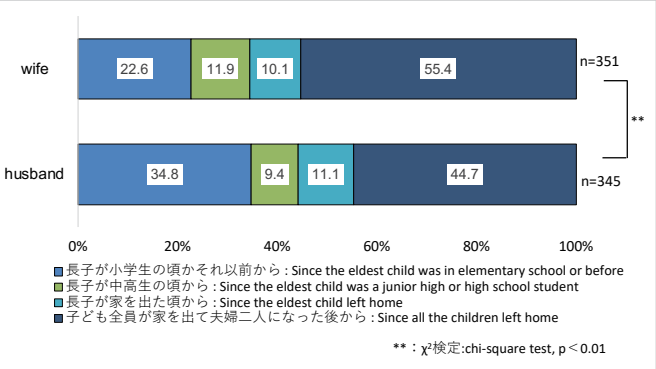


Fig.2 Occupancy of personal spaces (if any) by spouse
図 2　夫婦別、専用スペースの出現時期（所有者のみ）

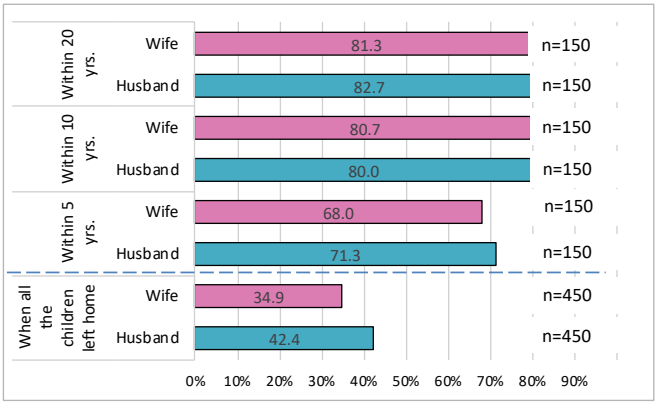


Fig. 3 Occupancy of personal spaces by spouse according to the number of years that have elapsed since their children left home
図 3 子ども独立後の経過年数別、夫婦の専用スペース所有率

就労をしているのは 53.8%、妻はフルタイム勤務 9.6%を含み現在何らかの就労をしているのは 29.4%である。

なお、本研究では、私室のうち、動線が公室から直結するものを連続室、公室からの動線が廊下を介するものを分離室と表現する。

２．夫と妻の専用スペースと使われ方

まず、夫と妻の専用スペースの存在状況とその経緯、使われ方をみる。夫、妻ともに住宅の中に専用スペースを持っている割合が非常に高く、夫は 78.0%、妻は 76.7%が何らかの専用スペースを確保していることが分かった。なお、現住宅の 94%で、3LDK、４LDK を中心に個室が 3 室以上あるなか、個室数別の専用スペース所有率にはほとんど差が見られなかった。図２は、夫婦それぞれの専用スペースを確保した時期について聞いた結果である。夫、妻ともに子ども全員が家を出て二人になってからと答えた割合が半数前後で最も多い。夫は長子が小学校の頃から持っていた人も 1/3 程度いるが、妻は、子ども全員が家を出てからが 55.4%と半数を越えている。図３は、子ども独立時と、子ども独立後の経過年数別の現在の専用スペース所有率をみたものである。現在専用スペースを持っている人については、夫婦ともに、多くがすべての子どもが家を出てから 5 年以内に専用スペースを確保し、10 年までにはほぼ確保し終わっている。限られた住空間の中では子ども部屋が優先されてなかなか確保できなかった専用室が、元子ども部屋等を使って実現し、すべての子どもが家を出てからおおむね 10 年までには、住み方を夫婦二人の生活に合わせて変更しているといえる。

図４は元子ども部屋が現在どのように使われているかを、子ども独立後経過年数別にみたものである。全体では、「物置部屋になっている」(35.6%) が最も多く、「子どものものをほぼそのままの状態で置いている」(29.8%) が続く。一方で夫や妻の「専用室として使っている」(各 27.8%、28.0%)も同じくらいある。また「子世帯家族の宿泊用の部屋として使っている」も一定ある (20.9%)。現住宅の個室数別でみると、物置部屋になっている部屋が、個室 3 室の事例 (30.9%) より 4 室の事例 (45.9%) でやや多い以外では大きな差はみられなかった。

子ども独立後の経過年数別では、「子どものものをほぼそのままの状態で置いている」は年数が経つに伴い急速に減少し、その分、夫や妻の「専用室として使っている」が増加傾向にあることが確認できる。一方で、「子どものものをほぼそのままの状態で置いている」は、子ども独立後 10 年を超えても 20.7%、「ほとんど使わない空き室になっている」も 7.3%残っている。子どもが家を出た後、または子どもが家を出ることを見越して、居室の間仕切りの変更を伴う大規模なリフォームをしたのは全体で 7.3%にすぎず、ほとんどの世帯が、夫婦だけの生活になっても間取りの変更を行わないままに住み方で対応していると言える。

専用スペースの位置をみる (図５)。専用室となっているのは、夫婦ともに、元子ども部屋と思われる分離室 (洋室) が最も多く、連続室の洋室、和室も一定ある。夫の専用室は分離室 (洋室) が特に多いのに対し、妻の専用室は、連続室 (和室・洋室) も使われていることは、妻の領域が LD を中心に広がっていることを示唆している。なお全体の 84.2%に和室があり、そのうち 93.1%は連続室の和室である。その他、妻を中心に、LD の一角、キッチンの一角などが専用スペースになっている場合もある。

専用スペースで行う行為についてみると (図６)、夫、妻ともに最も多いのは就寝であり約 6 割を占める。専用スペースはまずは夫婦別室就寝のために使われていることが分かる。テレビ以外の娯楽・趣味 (夫 49.3%、妻 44.6%)、くつろぎ (夫 39.0%、妻 36.2%)、デス

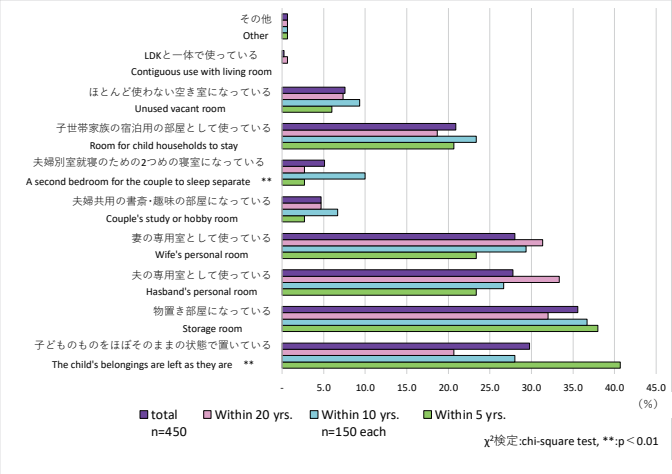


Fig.4　Current use of rooms left by children according to the number of years that have elapsed since they left home（MA）
図４　子ども独立後年数別、元子ども部屋の現状の使い方

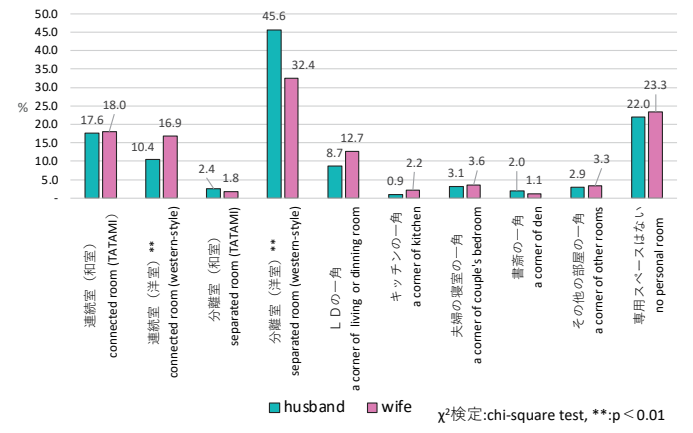


Fig. 5 Location of personal spaces by spouse（MA）(n=450)
図５　夫婦別、専用スペースの位置

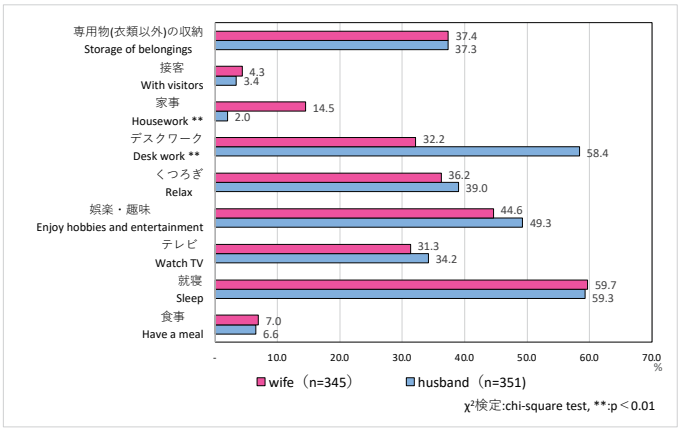


Fig. 6 Activities often performed in personal spaces by spouse (MA)
図６　夫婦別、専用スペースでよく行う行為

クワーク（夫 58.4%、妻 32.2%）も専用室で行われている割合が比較的高く、特にデスクワークを専用スペースでするのは夫に多い。「専用物の収納」の割合も夫婦共に 40%弱あり、専用室は個人のものの収納空間としても使われている。くつろぎやテレビを観る行為を専用スペースで行う人は比較的少ないが、3 割以上ある。逆にみれば、専用スペースを持つ人の過半が行っているのは、夫と妻の就寝と夫のデスクワークのみで、それ以外の行為を専用スペースで行う人は半数に満たないということである。以上から、リビング中心で過ごしているグループと、夫を中心に専用スペースの個室中心に過ごすグループの 2 つが存在していると推測される。

次に個人の所有物の収納場所から、個人領域を考察する。専用スペースを持っている場合について、夫、妻それぞれの所有物をどこに収納しているかをみたのが図 7 である。夫、妻ともに、自分のものを専用室に収納している率はかなり高い。専用室は、自分のものを置く場所として、それぞれの領域を形成していることが分かる。しかし夫と妻ではやや差がある。夫はいずれのものも自分の専用室に収納している率が半数を超え、それ以外の場所に収納しているのは、パソコンが LDK まわりに 31.9%ある以外はおおむね 10%以下である。一方妻は、専用室に収納しているものが多いものの、衣類

Table 2　Places often used for daily activities by spouse（MA）
表 2　夫婦別、生活行為をよく行う場所

Activities		n	Living room	Dinning room	Kitchen	Connected room (Tatami)	Connected room (Western-style)	Seperated room (Tatami)	Seperated room (Western-style)
食事 Eat meals	Husband	446	48.9	66.4	7.2	1.1	0.9	0.4	1.3
	Wife	450	51.6	62.4	5.1	2.0	1.1	0.7	1.6
就寝 Sleep	Husband	449	5.1	1.1	0.7	38.1	12.7	4.0	45.7
	Wife	449	6.5	0.7	1.3	36.7	18.5	2.4	41.4
くつろぎ Relax	Husband	447	83.2	12.3	0.9	9.8	7.4	1.1	13.9
	Wife	447	85.9	13.0	1.8	10.5	9.2	1.1	9.8
団欒 Enjoy conversation	Husband	439	90.7	16.9	2.1	3.0	2.5	0.5	3.0
	Wife	439	92.3	14.6	1.6	4.6	4.1	0.7	2.3
テレビ Watch TV	Husband	440	90.9	15.0	0.7	5.7	6.1	0.9	12.5
	Wife	445	92.8	13.9	1.6	6.1	6.1	1.1	7.0
趣味・娯楽 Pursue hobbies	Husband	424	57.8	8.5	1.7	10.6	11.3	1.7	30.7
	Wife	432	68.8	11.8	1.6	11.1	12.3	1.2	20.8
パソコン作業 PC work	Husband	433	48.7	9.9	0.9	8.3	11.3	2.3	33.0
	Wife	413	62.2	10.2	1.9	7.7	10.2	1.5	22.3
書きもの Writing	Husband	367	54.2	14.2	0.3	6.0	10.9	2.5	28.9
	Wife	363	63.9	19.6	1.9	6.6	10.7	1.1	14.9

Over 60%　Over 80%

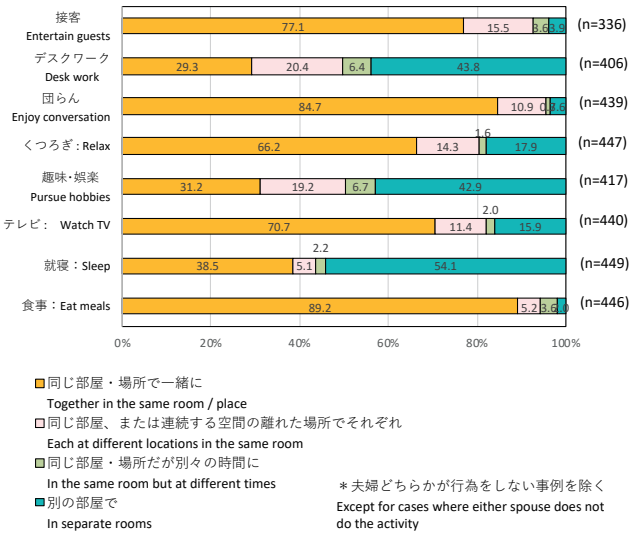


Fig.8 Place and duration of activities performed as a couple
図 8　夫婦の行為を行う場所と時間の関係

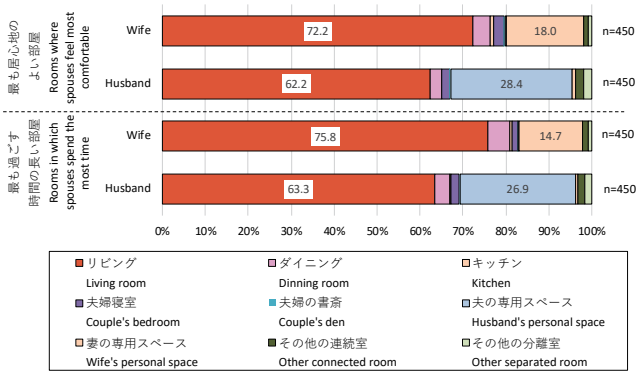
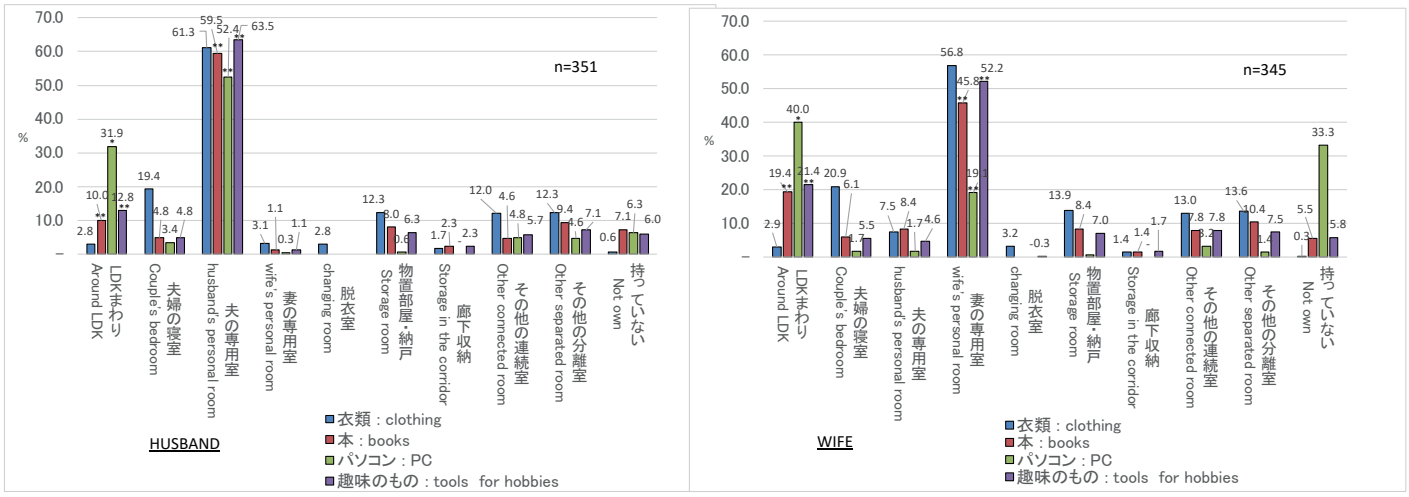


Fig. 9 Rooms in which spouses spend the most time and where they feel most comfortable（SA）
図 9　夫婦の最も過ごす時間が長い部屋と最も居心地がよい部屋



夫妻間の有意差: Significant difference between husband and wife　χ^2 検定:chi-square test, **:p＜0.01　*:p＜0.05

Fig. 7 Storage locations for belongings among spouses with personal spaces (MA)
図 7　専用スペースがある場合の、夫と妻の所有物の収納場所

以外は LDK まわりに置いている率が 20%を越えており、パソコンについては LDK まわりに置いている人が最も多い。

行為と収納の双方から、夫はより専用スペースを居場所としている人が多く、妻は専用室と LDK まわりの両方を居場所としている傾向が読み取れる。

3．住み方の共用傾向

専用室を持つようになった人が多いにもかかわらず、専用室で行う行為は限定的であった。では主な生活行為はどこで行っているのか。表 2 は、生活行為をよく行う場所（複数回答）を夫妻別に示したものである。夫婦ともに、就寝を除くすべての生活行為において、最もよく行う場所は、食事はダイニング、それ以外はリビングで、いずれも公室である。くつろぎ、団らん、テレビは夫婦ともにリビングでよく行う人が 80%以上、個人作業である趣味・娯楽、パソコン作業、書きものについても、特に妻はリビングでする人が 60%以上と多いことが分かる。

次に夫婦の関係を生活行為ごとにみる（図８）。同じ部屋で行う行為と、別の部屋で行う傾向が強い行為に分かれていることが分かる。食事、団らん、接客、くつろぎ、テレビは「同じ部屋・場所で一緒に」行う夫婦が多く、いずれも 60%を上回り、「同じ部屋や連続する空間の離れた場所でそれぞれ」を加えるとさらに多い。一方、デスクワーク、趣味・娯楽は、別の部屋で行う人が半数弱あり、前章で考察したように、それぞれが専用スペースで行う傾向がある。同時に、これらの行為は、「同じ部屋や連続する空間の離れた場所でそれぞれ」の比率も 20%近くあり、「同じ部屋・場所で一緒に」と合わせると概ね半数を占める。このように一緒にする訳ではない個人的な行為についても、リビング等の同じ空間内でそれぞれ行う人も少なくなく、夫婦二人の生活において、専用スペースを確保したあとも、住み方の強い共用傾向がみてとれる。一方、就寝については、半数以上が別室就寝である。すなわち、食事やコミュニケーションを伴う行為は夫婦で一緒に行う一方で、個人的な作業はそれぞれが行い、最も別室化が進んでいるのは就寝である。図 9 は、就寝時を除く在宅時に夫婦それぞれの最も過ごす時間が長い場所と、最も居心地がよい部屋を答えてもらったものである。夫、妻ともに、いずれもリビングと答えた割合が最も多く、ダイニングとキッチンを合わせた公室が、夫は 7 割近く、妻は 8 割前後を占める。

このように、大半の世帯では夫婦ともに LDK まわりの公室を主な居場所としており、行為、時間、意識としても住み方の共用傾向が強いことが確認できる。一方で、それぞれの専用スペースを居心地がよいと感じ、そこで長い時間を過ごしている人も一部存在する。専用スペースを主な居場所としているのは夫に多い。

4．収納からみた子ども独立後の夫婦の住み方

このライフステージの夫婦世帯は、家を出た子どもとの関係から、夫婦二人の生活になっても、それ以上のものの収納が必要になっている場合があると考えられる。家を出た子どもとの関係をみる。図 10 は、家を出た子どもの家までの時間距離を未既婚別に示したものである。既婚の子どもの方が近居している率が高く、30 分以内が 30%以上、60 分以内まで含めると半分近くになる。図 11 は、子の家までの時間距離別の子の訪問頻度である。時間距離が短いほど、また既婚

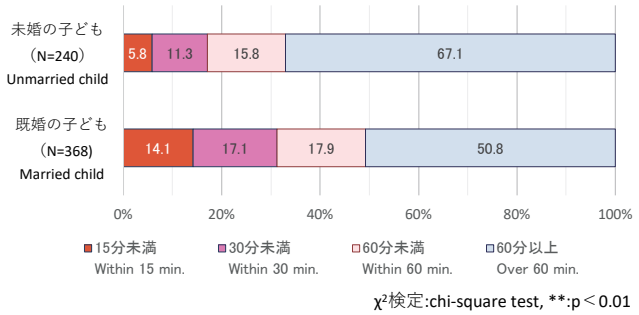


Fig.10 Time distance to an independent child's home
図 10　未既婚別子どもの家までの時間距離

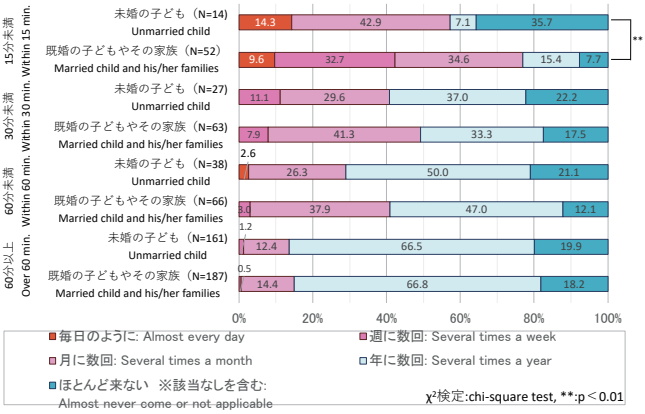


Fig.11 Frequency of visits by couple's children according to time distance between their homes
図 11　子の家までの時間距離別、子の訪問頻度

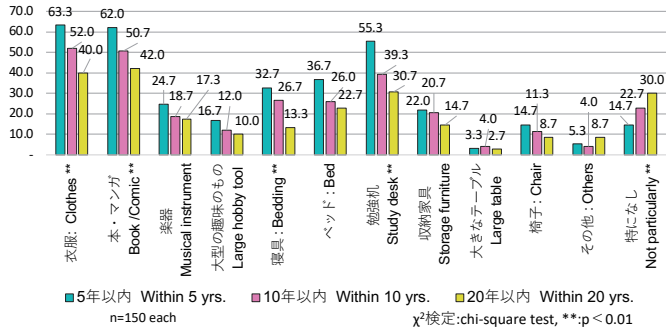


Fig.12 Belongings left at home by grown-up children
図 12　家に残っている独立した子どものもの (MA)

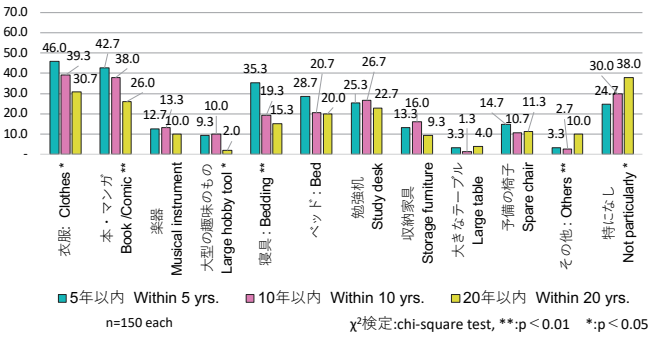


Fig.13 Items kept at home in anticipation of visits by grown-up children
図 13　独立した子どもの訪問に備えて置いているもの　(MA)

の子どもの方が、訪問頻度が高く、15 分未満の既婚子ども世帯では、月に数回以上の訪問が 8 割近くにのぼっている。このように、多くの夫婦世帯が家を出た子と近居し、親密な関係を維持していることが分かる。こうした関係のなか、子どもが家を出たあとも、子どもが置いていったものがたくさん残っていたり、また近居する子世帯が頻繁に訪問するような場合は、訪問する子や孫のためのものを置いていることがある。

図 12 は、家を出た子どものもので家に残っているものを、図 13 は、別居の子どもや子世帯家族が訪問するときのために置いているものを、子ども独立後の経過年数別に示したものである。全体に様々な子どもものが置かれていることが分かる。前者については、ベッドや机などの家具を含めて多くのものが残されているが、衣類、本・漫画、寝具、勉強机など多くの項目で、子ども独立後 5 年以内の時期が最も多く、年数の経過とともに少しずつ減っていることが分かる。後者についても、衣類、本・マンガ、寝具は、確実に減少しており、その他のものも減少傾向にあるものが多い。子世帯の訪問頻度が高いのは孫が幼い時期であることから[注2)]、孫の成長とともに置いておくものも減少していると推測される。収納に対する意識をみると(図 14)、収納スペースが不足していると感じている人が全体では 7 割近くあり、子どもの独立からの時間の経過とともに、収納不足はやや改善の傾向が見られるものの、有意な変化は確認されず、子ども独立後 10 年以上経っても 63.6%ある。

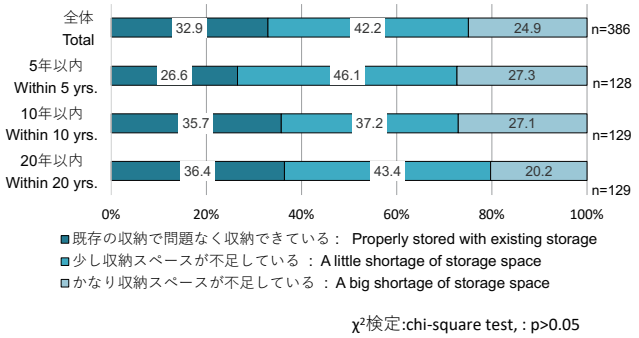
これらのことから、子ども独立後の夫婦世帯の住宅では、子ども独立後もしばらくは住生活、モノの双方の面で子どもの影響が強く残っているが、時間の経過とともに、子どもの置いていったものや子どもが帰って来た時のために置いているものを整理、処分し、次第に夫婦二人の生活にあった住まい方へと変容させていることが読み取れる。しかし、徐々に減ってはいるものの 10 年以上経っても衣類や本・マンガは 40%以上、ベッドや勉強机も 20%以上の世帯でまだ残っている実態もみてとれる。

5．個別事例からみた住み方

訪問調査を行った個別事例から具体的な住み方をみる。訪問調査 6 事例の一覧を表 3 に示す。

5-1　子ども独立後 5 年以内の事例

S-3、S-5、S-6 は子ども独立後 5 年以内の事例である。図 15（S-5）は、子ども独立後 2 年の 60 代夫婦の住み方例である。子ども 3 人はすでに家を出ているが、末の息子はまだ大学生で週末などにはしばしば下宿先から帰省する。間取りは 3 LDK で、元子ども部屋の 1 室は、学習机、二段ベッド等の家具と子どものものがそのまま残されている。北側の 1 室は衣類や使わない家具などが置かれ、完全な物置になっている。もう一つの連続室である和室は夫婦寝室であるが、リビングとの間の襖は取り外されており日中は一体空間として使われている。すなわち、夫婦が普段過ごす空間は LD と連続室の和室に限定されている。夫の専用スペースは、夫婦寝室の一角にある座卓で、書類やパソコンが置かれている。妻は主に LD で過ごし、リビングの一角に妻のライティングビューローがある。夫が先に就寝すると、リビングは消灯しなければならないため、妻はダイニングで過ごすが、将来はいつでも好きな音楽を聞いたりできる専用スペースがほしいと考えている。事例 S-3、S-6 においても、元子ども部屋がそれぞれまだ残っている。S-3 は 3 LDK で、3 つの個室は、夫婦寝室、子ども独立前からの夫の専用室と、元子ども部屋である。元子ども部屋は現在、夫婦の趣味室に改装中である。S-6 は 4 LDK で、1 室は連続室の和室でリビングと一体で使い、残り 3 つの分離室は、夫婦寝室、物置部屋、元子ども部屋である。元子ども部屋は子どもたちが帰って来た時の宿泊用の部屋として置いている。3 事例のうち夫



χ^2検定:chi-square test, : p>0.05

Fig.14 Perception of storage availability according to the number of years that have elapsed since the children left home
図 14　子ども独立後年数別、収納に対する意識

Table 3　List of empty nesters visited for the survey
表 3　訪問調査対象一覧

Sample No.	Age		子ども独立経過年数 Number of years that have elapsed since the children left home	就労形態 Employment status		居住地 Prefecture	延床面積 Floor area
	Husband	Wife		Husband	Wife		
S-1	80's	80's	Over 10 yrs.	自営 Working (self-	専業主婦 Housewife	大阪 Osaka	80㎡
S-2	60's	70's	Over 10 yrs.	定年退職 Retired	専業主婦 Housewife	大阪 Osaka	76㎡
S-3	50's	50's	Within 5 yrs.	パートタイム Working (part time)	専業主婦 Housewife	大阪 Osaka	76㎡
S-4	60's	60's	Within 10 yrs.	定年退職 Retired	定年退職 Retired	京都 Kyoto	63㎡
S-5	60's	60's	Within 5 yrs.	就労 Working	就労 Working	京都 Kyoto	63㎡
S-6	60's	60's	Within 5 yrs.	就労 Working	パートタイム Working (part time)	大阪 Osaka	85㎡

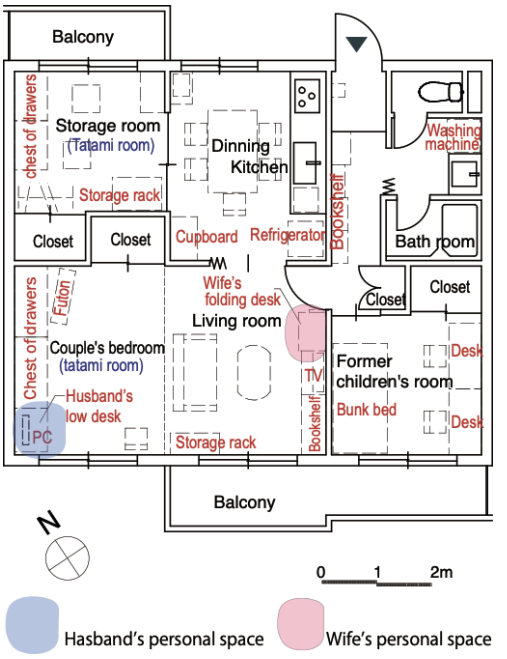


Fig.15 Space use for S-5　　図 15　S-5 の住み方

または妻の専用室があるのはS-3の夫の専用室のみであるが、この事例でも夫が専用室を使うのは休日だけで、平日は夫婦ともにLDでほとんどの時間を過ごす。

5-2　子ども独立後5年～10年以内の事例

子ども独立後5年～10年以内の事例はS-4の1例である。S-4の住み方を図16に示す。S-4は、子ども独立後8年の60代夫婦である。2人の子どものうち息子1人は結婚し近居しているが、家が狭いので会う時は息子の家に行く方が多い。間取りは3LDKで、元子ども部屋の分離室1室はすでに妻の部屋になっている。もう1室はタンスや本箱、その他雑多なものが床にも置かれ、完全な物置である。連続室である和室は夫の寝室であるが、日中は襖を開け放して、夫は和室のソファに座ってリビングのテレビを見る等、リビングと一体で使われている。夫婦が主に過ごすのはLDであり、妻のPCはリビングの一角の小さな座卓に置かれている。妻の専用室はあるが、寝る時以外はほとんどそこで過ごすことはない。

5-3　子ども独立後10年以上の事例

S-1とS-2は、子ども独立後10年以上を経過した事例である。図17（事例S-1）は、80代の夫婦の住み方例である。2人の娘世帯は年に2回、家族で泊まりに来る。間取りは2LDKで、分離室の1室は夫婦寝室で、中央に衣類ラック2つを並べて、衣類収納スペースをゾーニングしている。連続室の和室は、夫の仕事関係の商品などが多く置かれ物置になっている。娘世帯が泊まりに来るときは和室とリビングにはみ出して雑魚寝状態になる。和室の押入には来客用布団を収納している。夫の専用スペースはリビングの一角にあり、専用デスクで仕事をし、座卓でくつろぐ。妻はダイニングで過ごすことが多く、リビングで過ごすことはほとんどない。夫婦ともにそれぞれ別のスポーツや音楽など複数の趣味があり、同じLDにいながら、それぞれ、好きなことをして過ごしている。S-2は3LDKであるが、3つの個室は、夫婦寝室、夫の専用室、物置に使われている。この事例は6事例のなかで唯一、夫が専用室で過ごす時間が長い事例である。夫婦ともに多趣味で、夫の専用室にはパソコン、テレビがある。LDは妻のテリトリーであり、ダイニングテーブルにパソコンがあり、リビングには洋裁の道具やミシンが置かれている。すでに子どもの物はほとんど残っていないが、物置部屋には子ども世帯が訪問したときに使う座卓等が収納されている。

これら訪問6事例からは、アンケート結果を実証する具体的な住み方が確認できた。表4は6事例の個室の使われ方を整理したものである。子ども独立後5年以内の3事例では元子ども部屋がそのまま残っていた。下宿する学生等しばしば子どもが帰省するケースもあり、子どものベッドや学習机のほか、所有物も置いたままの状態である。一方、子ども独立後5年以上の3事例では子ども部屋のままの部屋はなく、夫や妻の専用室も現れている（S-2, S-3）。しかし、夫婦の主な居場所はリビングまわりである事例が多く（S-1, S-4, S-5, S-6）、LDやその連続室内に、夫や妻の領域が、小さな机、専用PCなどとともに形成されており、同じ空間内でそれぞれが過ごしている様子も見てとれた（S-1, S-2, S-4, S-5）。これには、専用室がある事例も含まれる（S-4）。

また特徴的なのが、6事例のうち5事例（S-2, S-3, S-4, S-5, S-6）で、1室が物置部屋になっていたことである。衣類を中心に雑多なものが置かれており、複数のタンス、本、食品ストックのほか、独

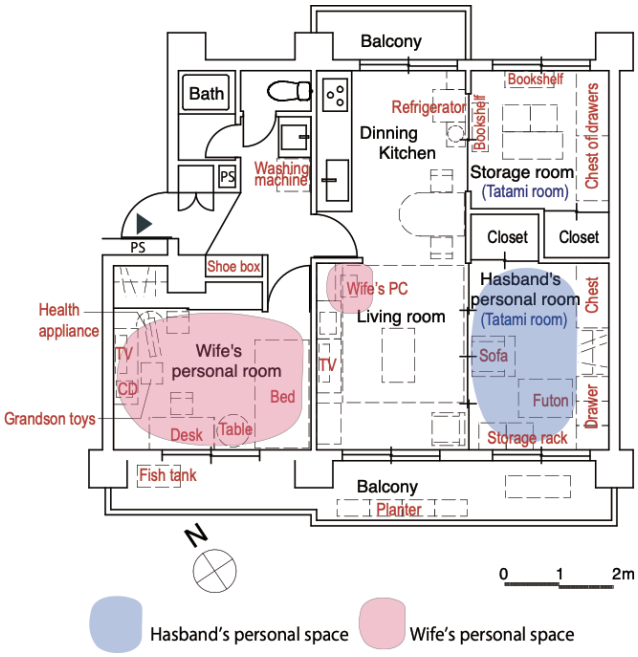


Fig.16 Space use for S-4　　図16　S-4の住み方

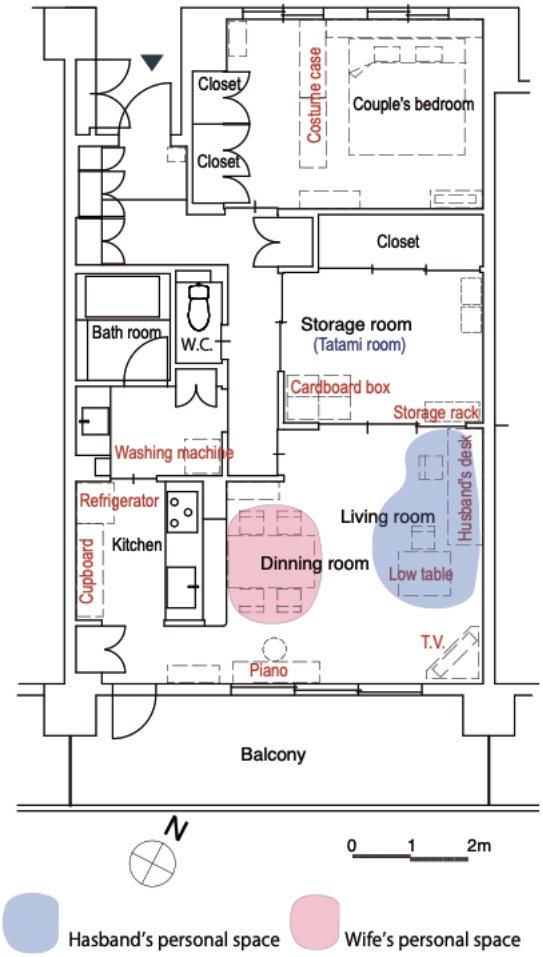


Fig.17 Space use for S-1　　図17　S-1の住み方

立した子どもの置いて行ったもの、子世帯が来た時用の家具も置かれていた。二人だけの生活であっても多くのものの収納が必要で、多くの事例で空き部屋に次第にものが置かれてゆき、雑然としたまま結果的に物置化している様子が窺えた。そうしたなか、S-6 は計画的に 1 室を納戸として整えている事例で、両壁にタンスや収納棚を置き効率よく収納できていた。

６．まとめ

以上、子ども独立後の夫婦世帯の住み方について、明らかになった知見は、以下のように整理される。

1)夫、妻ともに８割近くが専用スペースを所有しており、子ども独立後の時間経過とともに、その比率が増加している。特に妻は子ども全員が家を出て二人になってから取得した割合が高く、限られた住空間の中では子ども部屋が優先され確保できなかった夫や妻の専用スペースが、元子ども部屋等を使って実現している。

2)夫婦別室就寝は 6 割を超え、専用スペースで行う行為として最も多いのが就寝である。元子ども部屋に加えて、現代の集合住宅の多くに備わっている LD から直接出入りできる和室が、寝室を兼ねた専用スペースとして使われている。

3)就寝以外で、専用室で行われる行為として比較的割合が高いのは、趣味・娯楽（夫 49.3%、妻 44.6%）、くつろぎ（夫 39.0%、妻 36.2%）、デスクワーク（夫 58.4%、妻 32.2%）等の個人的な行為であり、特に夫はデスクワークを専用スペースでする人が多い。しかし、専用スペースを持つ人の過半が行っているのは、夫と妻の就寝と夫のデスクワークのみである。

4)一方で、夫婦ともに、各生活行為を主に行う場所の多くはリビングで、専用スペースで行うことがある行為においても、主に行う場所はリビングである。就寝時間を除く在宅時に一番長く過ごす場所も、最も居心地が良いと感じている部屋もリビングと答えた人が最も多く、住み方の強い共用傾向が確認された。特に、食事(88.4%)、団らん(82.7%)、テレビ(69.1%)、くつろぎ（65.8%)、接客(57.6%)と言った行為は、夫婦が同じ部屋・場所で一緒に行うと答えた割合が高く、その中心となる場所がリビングである。デスクワーク、趣味娯楽等の個人作業行為については、専用スペースで行う傾向が比較的高く、夫婦がそれぞれ別の部屋で行うものが約半数ある。しかし残りの半数は、「同じ部屋や連続する空間の離れた場所でそれぞれ」行うものも含めて、こうした個人作業行為もリビングまわりで行っている。訪問調査からは、半数以上の事例で、専用 PC や趣味の道具とともにリビングまわりに夫や妻の専用スペースが形成されている様子が読み取れた。

5)子ども独立後の夫婦世帯は、近居を含めて独立した子や子世帯との関係を強くもっていることが確認され、子世帯の宿泊用の部屋の確保に加えて、子ども関連のものを置いている。子どもがおいて行ったもの、子や子世帯のために置いている多くのものが住宅内にあり、夫婦二人分以上の収納スペース要求がある。収納不足は、子ども独立後の時間経過とともに改善される傾向があり、子どもが残していったものを一定は整理、処分し、夫婦二人の生活にあった住まい方へと変容させている。それでも 7 割近くが「収納スペースが不足している」と答え、子ども独立後 10 年以上たっても、訪問する子どものためのものを含めて、多くのものが置かれている。訪問調査では 1 室が納戸状態になっている事例が 6 件中 5 件あり、計画的な大型収納の必要性が示唆された。

Table 4　Use of private rooms by empty nesters visited for the survey
表 4　訪問調査事例の個室の用途

子ども独立経過年数 Number of years that have elapsed since the children left home	Sample No.	連続室 Connected room1	分離室1 Separated room1	分離室2 Separated room2	分離室3 Separated room3
Within 5 yrs.	S-3	夫婦寝室 Couple's bedroom	夫の専用室 Hasband's personal room	元子ども部屋 Former children's room	–
	S-5	夫婦寝室 Couple's bedroom	物置 Storage room	元子ども部屋 Former children's room	–
	S-6	リビングと一体 contiguous use with living room	夫婦寝室 Couple's bedroom	物置 Storage room	元子ども部屋 Former children's room
Within 10 yrs.	S-4	夫の専用室 Hasband's personal room	妻の専用室 Wife's personal room	物置 Storage room	–
Over 10 yrs.	S-1	物置 Storage room	夫婦寝室 Couple's bedroom	–	–
	S-2	夫婦寝室 Couple's bedroom	夫の専用室 Hasband's personal room	物置 Storage room	–

子どもが独立して夫婦のみの生活になった時、標準家族のための nLDK 型住宅では、時間の経過とともに、潜在化していた夫、妻の専用スペース要求が、元子ども部屋を使って実現しつつ、夫婦二人の住まいとして住み方が変更されていることが分かった。しかし、間仕切りの変更を伴うリフォームをしたのはごくわずかであり、ほとんどの世帯が既存の住空間に住み方を対応させている。その結果、子ども独立後 10 年を超えても、ほとんど使われない空き室の元子ども部屋や、子どものものをほぼそのままの状態で置いている元子ども部屋が一定数残っている実態も確認された。

加えて、実際の夫婦の住生活においては、就寝以外では、リビングで過ごす時間、リビングで行う行為が圧倒的に多いことも明らかになり、居心地がよいと感じる場所であることも含めて、時間、行為、意識の３つの観点から強い共用傾向が確認された。

これらのことから、子ども独立後の夫婦世帯の住宅では、夫と妻の別室就寝を保証し、必要に応じて趣味やデスクワークを行い関連するものを収納できる夫婦それぞれの専用室が必要であり、これらは既存の nLDK 型住宅の n 室の個室の一部を使って実現可能である。一方で、リビングまわりには、夫婦がともに過ごしたり、同じ空間内でそれぞれが個別の作業を行う居場所を確保できる広がりが必要である。また、別居の子どもとの繋がりを維持している世帯が多いことも分かり、居住者は二人であっても、子世帯の訪問に備えた空間や、収納スペース確保を考慮する必要性も確認された。これらのことは、使われなくなった個室を大型収納スペースとして整えたり、LD まわりの空間を拡大したり等、空間自体を生活に適応させる必要性も示唆している。

本研究は、長寿社会において家族のライフサイクルの一定の期間を占めるようになっている、子ども独立後に夫婦二人で過ごし、かつ夫婦ともに介護を必要としないライフステージを取り上げたものである。ただ言うまでもなく、これら世帯もいずれは単独世帯に移行するとともに、身体機能が低下し介護の課題が住み方にも影響する時期が訪れる。その段階では、nLDK 型住宅の余剰個室の使い方や、LD と個室の見守りが可能な連続性も課題になると思われる。住み替えも含めた次のライフステージへの接続については、今後の課題としたい。

謝辞

本研究の調査実施にあたって多大な協力をいただいた、当時大阪市立大学学生であった内田奈津実氏、阪神阪急不動産株式会社の松尾麻里子氏に感謝します。また、文部科学省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」令和 1 年度連携型共同研究助成、及び科研費 JP20K0485 の助成を受けたものである。

参考文献：

1) Yamazaki,S. and Takahashi,K.: A Study on The Spaces Where Husbands and Wives Spend Their Own Private Time in Their Homes—The Appearance and Organization —, Urban Housing Science, No.1, pp.117～,1993.3 (in Japanese)
山崎さゆり, 高橋公子：住戸内における夫・妻の個人的な場に関する研究一その出現と構造一, 都市住宅学, No. 1, pp. 117～, 1993. 3

2) Yasue,H. and Takada,M.: Spatial Units Arrangements of the Double-income Couple from the Viewpoint of the Individualization: A basic study on the special structure of multi-story housing Part 3, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No.568, pp.17-24,2003.6 (in Japanese)
安枝英俊, 高田光雄：生活単位の個人化という視点からみた共働き夫婦の居住空間の構成原理に関する考察 ： 集合住宅の空間構造に関する基礎的研究 その 3, 日本建築学会計画系論文集 568 号, pp. 17-24, 2003. 6

3) Tasaka,K.and Machida,R.: Housewives' Thoughts on Their Private Space: -Effects of Communication in the Family- A House-Planning Study for Establishing the Individual in the Family (2), Gakujyutuhoukoku of Kyoto Prefectural University, No.49, pp.13-21, 1997.12 (in Japanese)
田坂恭子, 町田令子：主婦の個室に対する意識－家族コミュニケーションへの影響について－家族の自立を可能にするための居住計画的研究（2）, 京都府立大学学術報告, 第 49 号, pp. 13-21, 1997. 12

4) Fuji,K. and Koito,A.: Way of Living and the Needs of Wives for Their Exclusive Use Space in the Houses - From the Research on Some Specialist Groups -, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No.706, pp.2621-2629,2014.12 (in Japanese)
藤井久美子, 小伊藤亜希子, 住まいにおける妻の専用スペース要求と住み方 −いくつかの専門グループに着目して−, 日本建築学会計画系論文集, 706 号, pp. 2621-2629, 2014. 12

5) Banba,K. and Takeda,K.: The Transition Process of Living Activity of the Elderly Living in Urban Housing Complex, Focusing on Individual Lifestyle: A Study on the Living Environment of the Elderly from the Viewpoint of the Stage of Their Ages Part1, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No.592, pp.25-31, 2005.6 (in Japanese)
番場美恵子, 竹田喜美子：都市集合住宅居住の自立高齢者における「個」を中心とした住まい方の変容過程 シルバーステージからみた高齢期の居住環境に関する研究 その 1, 日本建築学会計画系論文集, 592 号, pp. 25-31, 2005. 6

6) Sawada,T., Uchida,S., Watanabe,H., Taniguchi and K., Marusige,M.: The Dwelling Units Planning in Terms of the Transition of Family Composition along with Life Stage Development —A Study on the Transformation of Dwelling Style in the Dwelling Units-, Annual research report of Housing Research Foundation JUSOKEN, No.26, pp.191-202, 1999 (in Japanese)
沢田知子, 内田青蔵, 渡辺秀俊, 谷口久美子, 丸茂みゆき：ライフステージの展開に伴う非標準世帯への移行からみた住戸計画－集合住宅における居住過程に関する研究－, 住宅総合研究財団研究年報, No. 26, pp. 191-202, 1999

7) Ikeda,Y., Koito, A., Murata,J., Miyazaki,Y., Tanimoto,E., and Matsuo,M., A Study on Lifestyles of Married Couples who Finished Child Care Living in Condominiums, Proceeding of the research meetings of Architectural Institute of Japan Kinki Branch, No.60, pp.85-88, 2020.6 (in Japanese)
池田裕美子, 小伊藤亜希子, 村田順子, 宮崎陽子, 谷本英一郎, 松尾麻里子, 集合住宅における子ども独立後の夫婦世帯の住まい方, 日本建築学会近畿支部研究報告集第 60 号計画系, pp. 85-88, 2020. 6

8) Wang,F., Shirai,T., Fujimoto,M., Koito,A., Hiraoka,C., and Kondo,M., Lifestyle of Parent Households Living nearby the Child Households during Childcare (Part 1) -The Actual Situation of Communal Living-, Proceeding of the research meetings of Architectural Institute of Japan Kinki Branch, No.60, pp.385-388, 2020.6 (in Japanese)
王飛雪, 白井友崇, 藤本真凛, 小伊藤亜希子, 平岡千穂, 近藤雅之： 子育て中の子世帯と近居する親世帯のライフスタイル（その１）−生活共同化の実態について−, 日本建築学会近畿支部研究報告集第 60 号計画系, pp. 385-388, 2020. 6

注：

注 1） 調査対象の間取りは、３LDK と４LDK を合わせて 82.7%、延床面積は 61-100 ㎡が 85.6%を占めていた。

注 2） 筆者らによる別の調査で、子育て期の親世帯との近居は、子守りが主要目的であることが分かっている[8)]

HOW EMPTY NESTERS APPRECIATE THE SHARED USE OF COMMON DWELLING SPACES IN THEIR CONDOMINIUMS

Akiko KOITO [*1], *Yumiko IKEDA* [*2], *Junko MURATA* [*3] *and Yoko MIYAZAKI* [*4]

[*1] Prof., Graduate School of Human Life Science, Osaka Metropolitan University, Dr.Eng.
[*2] Sekisui House, LTD., M.Life Science
[*3] Prof., Faculty of Education, Wakayama University, Ph.D.
[*4] Assoc. Prof., Faculty of Human Life Science, Hagoromo University of International Studies, M.Ed.

This study seeks to identify housing design needs among elderly couple households by examining how empty nesters suffer from an incompatibility between their daily activities and the dwelling space available to them in their condominiums and by tracing how they adjust their space use over time. In both the online survey and the six home-visit surveys on household activities and space use, the target households were classified according to the number of years that had elapsed since their children had left home.

Over time, the surveyed empty nesters adopted the rooms left by their grown-up children as personal or storage rooms. That is, they adjusted their use of the dwelling spaces divided up according to the standard nLDK format used in Japan (i.e., living room, dining room, kitchen, and n additional rooms). Evidently, they have a strong desire for their own personal space. In practice, however, they also demonstrated a keen appreciation of the shared use of common dwelling spaces (i.e., living room and shared space connected to it) with their spouses in terms of time spent there, activities, and perceptions.

The key findings are as follows.

1) Once their children moved out, nearly 80% of both spouses secured their own personal spaces. This proportion increased over time as more of them started using the rooms left by their children.
2) More than 60% of the couples slept in separate rooms. Sleeping is the most common activity performed in their personal rooms.
3) Besides sleeping, the other individual activities most commonly performed in their personal spaces included the pursuit of hobbies, relaxation, and desk work. Nonetheless, in their personal spaces, if any, desk work was the only activity conducted by more than half of the husbands, aside from the separate sleeping arrangements practiced by both spouses.
4) Both spouses conducted their activities mostly in their living rooms, where they spent the most time and felt the most comfortable while at home. This proves their keen appreciation of the shared use of common dwelling spaces. Indeed, most couples spent time together in the same room or space to eat meals, enjoy conversation, watch TV, relax, and entertain guests. Around half of the respondents carried out desk work, pursued hobbies, and engaged in other individual activities in the living room. More than half of the couples that received a home visit had placed a personal computer or hobby-related products in the living room to form a personal space for either spouse.
5) Empty nesters maintain strong ties with their grown-up children and their new families. Storage space is in high demand among many couples who store belongings left by their children or other items intended for use by the offspring of their children. A shortage of storage space was indicated by over 70% of empty nesters, although this problem has eased over time. The need for well-designed housing to provide greater storage space was also evidenced by the exclusive use of an entire room for storage in five of the six households visited for the survey.

（2021 年 5 月 25 日原稿受理，2022 年 2 月 4 日採用決定）